「盲ろう者とその通訳介助者に対する社会医学的検討」

島崎　郁司、住尾　健太郎、中野　隆、矢倉　愛未

【目的・意義】

盲ろう者とは聴覚・視覚の重複障害がある人たちであり、盲ろう者通訳・介助者（以下、通訳介助者）を介し、意思疎通や意見表明を行っている。盲ろう者が社会参加をし、その福祉を増進するためには、通訳介助者の存在が不可欠である。通訳介助者を支えることは、盲ろう者自身を支えることと同義である。しかしながら、通訳介助者については、労働環境、作業負担、健康状態などの実態がほとんどわかっていない。本実習では、盲ろう通訳介助に際しての負担、活動実態などを調査するとともに、調査結果を踏まえて、負担軽減策などについて検討を行った。

【対象・方法】

1．　事前学習

ビデオや資料により、盲ろう者の生活、コミュニケーション手段になどついて学習し、彼らが抱える問題を把握した。

2．　フィールドワーク

- 通訳介助者の抱える問題を理解するため、兵庫県立聴覚障害者情報センターで行われた大阪社会医学研究所による面接聞き取り調査に同席した。(9/30)
- 滋賀県内の盲ろう者の生活、触手話通訳などについて理解を深めるため、特定非営利活動法人・しが盲ろう者友の会（以下、「友の会」）の理事会を見学した。(10/13)
- 指定障害者福祉サービス事業所の「みみの里」を訪問し、作業内容（トリミング、縫製、菓子製造等）、同事業所で行われている盲聴導犬の養成の様子などを見学した。(10/17)

3．　アンケート調査

(1) 目的：通訳介助者の活動状況や負担を把握し、実働数や登録数を増やすためのヒントを得ること
(2) 対象と方法：「友の会」に登録している通訳介助者100名に対し、郵送法で実施。

【結果】

1．事前学習で分かったこと

①　盲ろう者について

〈人数〉

推定で、全国で 22,000 人、滋賀県内では 238 人とされる。県内の「友の会」登録者（2011 年度）は 21 人。

〈コミュニケーション手段〉

「全盲+全ろう」の組合せよりも、視覚又は聴覚の一部、あるいはその双方が残っている人が多く、「弱視+ろう」、「盲+難聴」、「弱視+難聴」の状態もある。コミュニケーション手段は障害状態や障害に至る経緯により選択されている。聴覚障害の後に視覚障害が発生した場合（ろうベースの盲ろう者）には触手話、接近手話、筆談が、視覚障害の後に聴覚障害が発生した場合（盲ベースの盲ろう者）には指点字、手書き文字、音声通訳が用いられることが多い。通訳介助に際して、通訳介助者は長時間にわたり負担のかかる不自然な姿勢をとり続けることとなるため、頸肩腕障害、腰痛、背部痛などが生じやすい。

〈盲ろう重複障害が生じる原因〉

視覚と聴覚に障害をもたらす原因は、それぞれ別な場合と、同時の場合がある。

視覚障害の発生原因として先天性、事故、糖尿病性網膜症、緑内障、白内障、網膜色素変性症、加齢などがあり、聴覚障害の発生原因としては先天性、事故、乳幼児期における高熱（肺炎、おたふくかぜ、はしかなど）や中耳炎、騒音、ストレス、老人性難聴などがある。先天性では、多くが遺伝性による。

同時に障害をもたらす原因としては、アッシャー症候群（聴覚障害に進行性の眼疾患である網膜色素変性を伴う）が最も多いと考えられている。アッシャー症候群は学齢期にはあまり視覚障害が顕在化しないため、家庭においても、主たる在籍機関であるろう学校においても見逃されやすい。他に、超低体重出生、先天性風疹症候群、CHARGE症候群、サイトメガロウィルス感染症、ダウン症候群、事故、髄膜炎などがある。

〈生活支援制度〉

国の制度（厚生労働省委託事業）として、盲ろう者関係生活相談事業、盲ろう者向け通訳・介助者養成事業、盲ろう者向け通訳・介助者派遣事業がある。滋賀県は、「友の会」に生活訓練事業、相談支援事業および派遣事業を、滋賀県立聴覚障害者センターに養成事業を委託している。

② 通訳介助者について

〈人数〉

全国で推定 3,315 人。滋賀県では 2011 年度の「友の会」登録者 100 人（実働人数：約 30 人）。現状では、登録している盲ろう者 21 人の派遣希望に対する人員は確保できているとのこと。

〈報酬など〉

時給 1,470 円。盲ろう者一人あたりの通訳介助時間を月 20 時間として補助金が交付されている。

〈検討課題〉

盲ろう者の増加などにより、通訳介助の派遣依頼が増えた場合、現在の介助者数で十分であるか、そもそも、一人あたり月 20 時間という通訳介助時間で十分であるのかについて検討する必要がある。

2. フィールドワークで分かったこと

① 兵庫県立聴覚障害者情報センターで行われた面接聞き取り調査（同席）

3人の通訳介助者から話を聞き、通訳介助の作業負担などの実態を知ることができた。通訳の仕事に誇りを持っていることが感じられた。

② 「友の会」の理事会の見学

触手話通訳の実際を見学した。1人の盲ろう者に対し2～3人の通訳介助者が対面して交代で音声と触手話の通訳を行っていた。通訳介助者の人数は、2時間以内なら2人、それ以上であれば4人であるが、通訳介助者の中にろう者を含む場合は2時間以内でも3人体制で行うとのこと。

盲ろう者と通訳介助者が対面で椅子に座り、互いの上肢を中空保持した状態で手を触れ合う形で触手話を行うため、通訳介助者の手、肩、腰への負担が大きく、頸肩腕障害となるリスクがある。盲ろう者と通訳介助者の体格差が大きい場合には、負担はさらに大きくなる。通訳介助者だけではなく、盲ろう者にとっても通訳介助時の姿勢を続けることは負担であり、腰痛を訴えることもある。また、身体的負担だけではなく、通訳介助者は音声言語と触手話の変換を瞬時に行うが、その際、音声と触手話では伝達速度が異なるため、情報を圧縮する必要があり、頭の疲労が大きい上、うまく伝わらないことなどもあり、精神的負担も大きいことがわかった。

③ びわこみみの里

盲ろう者が就労訓練と実際に働く様子のほか、盲聴導犬の訓練も見学した。盲聴導犬の育成は全国的にも珍しい試みであり、盲ろう者について理解を広げるための手段の一つと考えられる。

3. アンケート調査の結果

[回収率] 62% （62/100 名）

[通訳介助者の属性などについて]

① 性・年齢など

女性が 90.3%、男性が 9.7%であり、年齢については、30 歳代が 3.2%、40 歳代が 17.7%、50 歳代が 29.0%、60 歳以上が 50.0%であった。また、健聴者が 85.5%であり、聴覚障害者が 14.5%であった。

② 就労状況

「盲ろう通訳介助」以外に仕事をしている人が 38.7%であり、していない人が 61.3%であった。

仕事の内容は手話通訳者/養成講師、介護ヘルパー等福祉関係が多く、平均労働時間は 21.5 時間であった。

③ 登録手話通訳者・要約筆記者として活動の有無など

活動している人が 45.2%、していない人が 51.6%（無回答 3.2%）であった。過去一年の派遣頻度は、週 1 回以上が 17.9%、月 3～4 回が 10.7%、月 1～2 回が 28.6%、2 ヶ月に 1～2 回が 32.1%、それ以下が 10.7%であった。

④ 視覚障害者のガイドヘルパーまたは点字の活動の有無など

活動している人が8.1%、していない人が88.7%(無回答3.2%)であった。過去一年の派遣頻度は、週1回以上が1人、月1～2回が3人、2ヶ月に1～2回が1人であった。

[通訳介助者の活動について]

① 登録してからの活動年数

半年から12年以上という人までおり、平均活動年数は4.9年で、活動年数3年が最多の17.7%であった。

② 盲ろう者とのコミュニケーション方法

頻度の高いものから順に番号をつけてもらったところ、触手話での通訳介助が最多であった。結果は次の通り。

	触手話	接近手話	指点字	手書き文字	筆記	音声	その他
1位	86.4%	6.8%	1.7%	11.9%	1.7%	1.7%	0%
2位	3.4%	61.0%	0%	16.9%	5.1%	1.7%	0%
3位	1.7%	6.8%	5.1%	40.7%	5.1%	10.2%	0%
4位	0%	6.8%	0%	5.1%	3.4%	3.4%	0%
5位	1.7%	0%	0%	0%	5.1%	1.7%	0%
6位	0%	0%	1.7%	0%	0%	1.7%	1.7%
7位	0%	1.7%	0%	0%	0%	0%	0%

③ 「通訳・介助」を始めたきっかけ

「聴覚障害者との関わりの中で関心を持った」が最多で62.1%であった。結果は次の通り。

人の役に立ちたい	25.9%
盲ろう者の役に立ちたい	34.5%
知り合いに盲ろう者がいる	17.2%
聴覚障害者との関わり(手話通訳、要約筆記、サークルなど)の中で関心を持った	62.1%
視覚障害者との関わり(点字や朗読の活動など)の中で関心を持った	10.3%
自分のスキルアップのため	13.8%
何となく	10.3%

④ 「通訳・介助者」として派遣された頻度(過去一年)

「月1～2回」の派遣が最多で30.6%であるが、「2ヶ月に1～2回」以下が59.7%となっている。結果は次の通り。

週1回以上	1.6%
月3～4回	8.1%
月1～2回	30.6%
2ヶ月に1～2回	17.7%
それ以下だが1回はあった	21.0%
全くなかった	17.7%

⑤ 今後の派遣(活動)頻度についての希望

「今のままでよい」が69.4%、「増やしたい」16.1%、「減らしたい」8.1%、無回答6.5%であった。

減らしたい理由(複数回答)としては、「身体的にきつい」1人、「時間的に余裕がない、忙しい」1人、「謝金が少なすぎる」1人、「その他」として、孫のお守りや介護のためを挙げた人が2人であった。

⑥ 活動を増やすために望まれるもの

「通訳介助技術を維持・向上するための研修会」が最多で58.6%、「活動に見合う報酬」は8.6%であった。

通訳介助技術を維持・向上するための研修会	58.6%
経験豊富な人と組んでの活動	37.9%
通訳・介助者同士の交流	36.2%
盲ろう者からの感謝	10.3%
家族の理解	13.8%
社会一般の理解	34.5%
行政の理解、制度の改善	36.2%
活動に見合う報酬	8.6%
交通手段の確保	31.0%
その他	6.9%

(その他の具体的記述)

- 通訳姿勢・負担を軽減する補助具等の開発
- 自家用車での移動
- 利用者の家族の理解
- 友の会の運営方法の改善

⑦ 「通訳・介助」の活動中に嬉しい・楽しいと感じたこと

「あった」が 79.0%、「なかった」が 14.5%、無回答が 6.5%であった。具体的な内容は次の通り。

盲ろう者から感謝の言葉をもらった	46.9%
上手く伝えられた	42.9%
通訳・介助者仲間と楽しい活動ができた	42.9%
周囲の人たちや家族から理解があった、ねぎらいの言葉をかけてもらった	14.3%
その他	16.3%

（その他の具体的記述）
- 盲ろう者とおしゃべりができる
- 盲ろう者と楽しい交流ができた。会話が楽しかった
- 盲ろう者の楽しそうな様子
- 受け身だった盲ろう者が自分の意見を積極的に言え，主体的な行動の芽吹きが見えたとき
- 盲ろう者本人が自分達の将来について考え行動につなげようとしている
- 盲ろう者が社会参加していると感じるとき、盲ろう者のニーズが実現できるとき
- 盲ろう者と一緒に活動できた
- 行ったことのない場所を訪れることができた

⑧ 「通訳・介助」の活動中につらい・いやだと感じたこと

「あった」が 71.0%、「なかった」が 19.4%、無回答が 9.7%であった。具体的な内容は次の通り。

上手く伝えられなかった	68.2%
作業中に体が疲れてきた(痛み、だるさなどを含む)	15.9%
作業中に頭が疲れてきた	6.8%
拘束時間が長かった	22.7%
休憩が短かった	6.8%
通訳・介助者仲間の態度や言葉に傷ついた	27.3%
盲ろう者の態度や言葉に傷ついた	31.8%
周囲の人たちや家族の理解がなかった、態度や言葉に傷ついた	6.8%
その他	15.9%

（その他の具体的記述）
- 盲ろう者が休憩なしで疲れて手が重くなったとき。
- けいわん休業中だが、また体が壊れるのが怖くて盲ろう通訳に復帰できない
- 盲ろう者の態度や言葉に傷ついている現場を見るとき
- 盲ろう者の思いが実現されないとき
- 伝わるまでに苦労や理解することにたどりつくまでに時間が非常にかかった
- 盲ろう者の体重が乗ってきた
- ペアの人がなかなか交代してくれなかった
- 飲酒、口臭がひどい

⑨ 「通訳・介助」に支払われるべき報酬額

「約 500 円」1.6%、「約 1,000 円」16.1%、「約 1,500 円」35.5%、「約 2,000 円」17.7%、「約 3,000 円」12.9%、「それ以上」0%であり、「約 1,500 円」（現状の金額）が最多であった。

［通訳介助者の健康状態について］

① 1～2か月の生じた症状（盲ろう通訳・介助の活動とは関係なく）など

	いつも	よくある	時々	ない
一日の疲れを翌日に持ち越す	3.2%	27.4%	50.0%	19.4%
肩や首がこる	16.1%	21.0%	41.9%	19.4%
腰がだるい、いたい	11.3%	19.4%	30.6%	35.5%
目が疲れる	11.3%	33.9%	24.2%	29.0%
耳鳴り	3.2%	3.2%	6.5%	82.3%
聞こえにくい	4.8%	0%	19.4%	71.0%
全身がすっきりしない	4.8%	11.3%	46.8%	35.5%
イライラする	0%	8.1%	50.0%	38.7%
ゆううつな気分	0%	12.9%	40.3%	43.5%
気力が出ない	1.6%	11.3%	38.7%	46.8%
盲ろう関係のことで頭がいっぱい	0%	3.2%	17.7%	75.8%
相手の手の感触がイヤと感じる	0%	0%	9.7%	87.1%

- **過去 1 年間での肩や腕の症状での治療（整骨院等を含む）**
  ある 25.8%
  ない 71.0%

- **過去 1 年間の湿布やマッサージ器などの使用**
  よくある 22.6%
  時々ある 33.9%

② 盲ろう通訳・介助を長く続けていると感じる症状

	強くあてはまる	あてはまる	合計
1 肩や頚がだるくなる	13.5%	30.8%	44.2%
2 肩や頚や腕がいたくなる	7.7%	25.0%	32.7%
3 腰や背中がいたくなる	9.6%	21.2%	30.8%
4 腕や指が動かなくなる	3.8%	9.6%	13.5%
5 手や足がしびれる	1.9%	3.8%	5.8%
6 息苦しくなる	0%	11.5%	11.5%
7 目がいたくなる	0%	17.3%	17.3%
8 目がかわいてくる	0%	17.3%	17.3%
9 まばたきが多くなる	1.9%	1.9%	3.8%
10 動悸がする・冷汗が出る	1.9%	3.8%	5.8%
11 頭の中が白くなり何も考えられなくなる	5.8%	11.5%	17.3%
12 話の内容がつかめず、まとめられなくなる	5.8%	44.2%	50.0%
13 時間が過ぎるのが長く感じる	5.8%	25.0%	30.8%
14 早めにかわってもらいたくなる	3.8%	3.8%	7.7%
15 相手の手を重く感じる	9.6%	42.3%	51.9%
16 その他	0%	3.8%	3.8%

（その他の具体的記述）
・ 眠くなる
・ のどが渇く

[調査結果のまとめ]

今回の調査では、通訳介助者の 90.3%が女性で、60 歳以上が 50%（50 歳以上は 79.0%）、聴覚障害を持つ人も 15%おり、通訳介助以外に仕事をしている人が 38.7%であった。仕事の内容としては手話通訳者/養成講師、介護ヘルパーなど福祉関係が多く、平均労働時間は 21.5 時間であった。また、視覚障害者のガイドヘルパーまたは点字の活動している人は 8.1%であるのに対し、登録手話通訳者・要約筆記者として活動している人が 45.2%であった。

通訳介助者としての平均活動年数は 4.9 年であり、「活動年数3年」が最多(17.7%)であった。過去一年に派遣された頻度については「月 1～2 回」(30.6%)が最多であるが、「2 ヶ月に 1～2 回」以下が 59.7%となっている。今後の派遣頻度については「今のままでよい」69.4%、「増やしたい」16.1%、「減らしたい」8.1%であった。活動を増やすために望まれるものとしては、「通訳介助技術を維持・向上するための研修会」が最多(58.6%)であり、「活動に見合い報酬」は 8.6%であった。なお、「通訳・介助」に支払われるべき報酬額は「約 1,500 円」（現状の金額）が最多(35.5%)であり、「約 2,000 円」以上との回答は 30.6%であった。

盲ろう者とのコミュニケーション方法は触手話が最も多く、次いで接近手話、手書き文字という順番であった。

活動を始めたきっかけは「聴覚障害者との関わりの中で関心を持った」が最も多く(62.1%)、次いで「盲ろう者の役に立ちたい」(34.5%)、「人の役に立ちたい」(25.9%)というものであった。「通訳・介助」の活動中に嬉しい・楽しいと感じたことが「あった」と回答した人は 79.0%であり、その具体的な内容をたずねたところ、「盲ろう者から感謝の言葉をもらった」(46.9%)、「上手く伝えられた」(42.9%)、「通訳介助者仲間と楽しい活動ができた」(42.9%)であった。逆に、「通訳・介助」の活動中につらい・いやだと感じたことが「あった」と回答した人も 71.0%おり、その具体的な内容をたずねたところ、「上手く伝えられなかった」(68.2%)、「盲ろう者の態度や言葉に傷ついた」(31.8%)、「通訳介助者仲間の態度や言葉に傷ついた」(27.3%)であった。

盲ろう通訳・介助を長く続けていると感じる症状としては、「相手の手を重く感じる」(51.9%)、「話の内容がつかめず、まとめられなくなる」(50.0%)、「肩や頚がだるくなる」(44.2%)、「肩や頚や腕がいたくなる」(32.7%)、「腰や背中がいたくなる」(30.8%)、「時間が過ぎるのが長く感じる」(30.8%)との回答があった。

【考察】

調査結果を踏まえ、通訳介助者の負担を減らすために施策を検討した。

1 すぐに実施できる施策

現在登録している通訳介助者の活動しやすい環境を整え、身体的・精神的負担を軽減すること。その結果、実働者数や活動回数が増えれば、個々の通訳介助者の負担が軽減されると考えられる。

〈身体的負担を軽減する方法〉

作業管理： 交代時間の短縮、ひじ置きなど補助機材の使用の推進

作業環境管理： 相互の距離が離れている状態で上肢を中空保持した場合には腰の負担が大きくなるため、盲ろう者と通訳介助者が対面して座ったときの距離を適切に保つこと、適度に休憩を入れ、心理的にも適切な距離を保つことなどに配意した適切な会場設営や運営、作業環境に関する介助者の意見聴取に基づく改善

健康管理： 健康診断、腰痛・頸肩腕障害の予防のための定期的なストレッチ体操

〈精神的負担を軽減する方法〉

通訳介助のスキルアップのためのフォローアップ勉強会、経験のある人とペアを組んでの通訳介助、通訳内容による時給の増額、通訳介助者や盲ろう者との交流会や意見交換会の開催による相互理解の促進

2 長期的な施策

通訳介助者数を増やすこと。アンケート調査の結果から、盲ろう通訳介助としての活動を始めたきっかけは「聴覚障害者との関わりの中で関心を持った」が最も多く、通訳介助以外に手話通訳者/養成講師、介護ヘルパーなど福祉関係の仕事をしている人が多いことがわかったため、手話サークルの参加者、聴覚障害者向けの作業所や職業訓練所などで働く人を中心に、盲ろう通訳介助の楽しさややりがいなどを伝えつつ、活動に勧誘することが効率的と考えられる。また、通訳介助は高度な技能を必要とする特殊な仕事であり、すぐには通訳介助者数を増やすことはできないが、盲ろう者と触手話でコミュニケーションをとることが最も多いことからも、手話を習得している人であれば、通訳介助活動に参加しやすい。

同時に、通訳介助者の仕事に対する認知度をより高めるために、市町村の広報などで活動を取り上げてもらいつつ、通訳介助者を募集したり、盲ろう者とふれあいを持ってもらえるようなイベントを開催したり、「友の会」のホームページを開設したりすることも効果的であると考える。

3 課題

通訳介助者の派遣事業や盲ろう者の生活訓練事業などを行っている「友の会」の活動資金の大部分は、滋賀県からの委託費や補助金である。県の財政状況や社会福祉費用の増加に鑑みれば、委託費や補助金の増額はあまり期待できない。一方、通訳介助者を増やす活動や負担を軽減する方策を実施するためには資金が必要となることが多く、また、スタッフの数も少ないことから、活動が制約される場合も多いと考えられる。ほかの障害者団体などにもあてはまるが、安定した活動資金とボランティア的に働いてもらえるスタッフの確保が課題となる。

【結論】

盲ろう者については、実数も正確に把握されていないなど、社会的な認知度は低い。そして、盲ろう者の生活を支える通訳介助者についてもほとんど知られていない。通訳介助者はボランティア的に活動をしている人たちであり、心身に障害などが発生した場合の十分な補償もない。制度や資金などの制約がある中で、明確な解答は得られなかったが、このような人たちを誰がどのように守ればよいのかを考えるよい機会となった。

盲ろう者を含む障害者などの社会的弱者と呼ばれる人たちだけでなく、そうした人たちを献身的に支える人たちがいることを決して忘れることなく、将来、医師という立場で何ができるのかを考え続けていきたい。

【謝辞】

特定非営利活動法人 しが盲ろう者友の会、びわこみみの里、兵庫県立聴覚障害者情報センター、大阪社会医学研究所の中村賢治先生、重田博正先生、特定非営利活動法人 東京盲ろう者友の会の谷沢様、小平様、衛生学部門の北原照代先生、辻村裕次先生には大変お世話になりました。深い感謝を申し上げます。

【参考文献】

・盲ろう者への通訳・介助―「光」と「音」を伝えるための方法と技術―, 全国盲ろう者協会 編著, 2008
・社会福祉法人全国盲ろう者協会 HP http://www.jdba.or.jp/index.htm
・特定非営利活動法人（認定特定非営利活動法人）東京盲ろう者友の会 HP http://www.tokyo-db.or.jp/